小・中・高校生の家事労働と家族間コミュニケーションとの関係

鎌野育代*・寺本果乃子**

Ikuyo KAMANO・Kanoko TERAMOTO

Relationship Between Family Communication and Domestic Labor in Elementary, Junior High and High School Students.

要　旨

小・中・高校生を対象として、家庭でのコミュニケーションの実態調査を行った。また、家族間コミュニケーションについて検討するとともに、家事労働の実態調査も行い、児童・生徒の家事労働と家族間コミュニケーションとの関係について明らかにすることを目的とした。なお、家族間コミュニケーションの状況を明らかにするために中間（2002）の示した説明・交渉スキル、親和感表現スキル、協働スキル、サポートスキルの4つの構造に依拠し、家庭生活における具体的な行為・行動として質問項目を作成した。

今回の調査により、家族間コミュニケーションでは、小・中・高校生で発達段階による差が見られ、説明・交渉スキルは高校生の方が高く、協働スキル・サポートスキルは発達段階ごとに低くなっていくことが明らかとなった。また、性別による差も見られ、男子よりも女子の方がコミュニケーションをとっていることが分かった。家事労働については、一週間の家事労働時間を調査したところ、小・中・高校生と発達するにつれて、家事労働時間は大幅に減少しているという状況であることが分かった。家族間コミュニケーションと家事労働との関連については、協働スキルとサポートスキルにおいて有意な結果が得られたことから、少なからず家事労働と家族間コミュニケーションには関係があることが明らかとなった。

【キーワード：家族間コミュニケーション、家事労働、小学生、中学生、高校生】

1　問題の所在と目的

家庭科は生活を学びの対象とし、日常生活にかかわる知識や技能の習得を通し、自らの生活を振り返り、よりよい生活に向けて工夫し創造し、実践できる力を身につけることが求められる教科である。一方、平成20年改訂の学習指導要領の成果と課題においては、児童生徒の学習への関心や有用感が高いなどの成果がみられるものの家族の一員として協力することへの関心が低いこと、家族や地域の人々とかかわること、家庭での実践や社会に参画することが十分でないことが課題として挙げられている（文部科学省, 2016）。また、家庭の仕事に対する子どもたちの関わりについて「子どもと家族に関する国際比較調査」（内閣府, 1995）の結果を見ると、日本はアメリカや韓国に比べてあまり家事を分担していないことがわかる。また、都市生活研究所の報告（2017）によると、食料品などの買い物、料理、掃除のすべてにおいて1993年に比べて2014年は子どもの家事参加が減少していたことが報告されている。さらに、2014年にはいずれの家事も「ほとんどやらない」が7割近くになっており、「お手伝い」をほとんどしない子どもが多数を占めるようになっていることがわかる。これらの指摘からも、家庭で子どもが生活技能を学ぶ機会が減少していること、家庭科という教科を通し学校で学んだことも繰り返し家庭の中で実践され身につけていくことが難しい状況であるということがわかる。

家事参加によって育まれる能力について、田中（2015）は児童の家事分担度と協調性の程度との間に一定の関係が見られ、家庭生活に積極的に参加し家事を分担する児童は、分担をあまりしない児童より親切で、より人の助けになる態度を身につけている傾向があることを報告している。また、宇佐美ら（1993）は、家事参加をよくしている児童は親子関係が良好な傾向にあり、家事参加によって積極的な親子の会話、信頼関係が生まれ、親子関係に良い影響を与えること、家事参加には子どもの自立を促し、親子の信頼関係を深め、技能の伝承などの意義があることを指摘している。さらに、金良ら（2013）は家族とのコミュニケーションと中学生の生活技術との関連性について分析し、コミュニケーション度と生活技術の定着度、並びにコミュニケーション度と生活技術に関するほとんどの項目で正の相関がみられたことを報告している。以上の結果からも、子どもの家事労働が子どもの育ちや家族とのコミュニケーション等との関連性がわかる。一方で大久保ら

*　島根大学学術研究院教育学系
**　島根大学教育学部人間生活環境教育講座（元）

(2014)は「子どものコミュニケーション能力の低下」言説について小学校と大学生を対象とした調査から約10年前と比較して現在の小学生の社会的スキルは低下していないことを指摘し、現在の子どもたちのコミュニケーション能力が低いという多くの先行研究の暗黙の前提を覆すものになったことを示している。しかし、このコミュニケーション能力にはさまざまな側面があり、その中でも中間(2002)はコミュニケーションの目的･場面･手段の関係を図式化し、これら、さまざまな側面が統合されて、日々のコミュニケーションは進められ、人間関係が形成されていくことを示した。

家事労働と家族との人間関係とのつながりについて様々に報告されていることを述べたが、コミュニケーションに関するさまざまな言説等も踏まえ、様々な側面をもつコミュニケーション能力を構造的に捉え、子どもの家事参加との関連性について明らかにする必要があると考えた。また、家事労働をよくしている児童は親子関係が良好な傾向にあることが示され、家事労働を児童が家族と一緒に行うことが家族とのコミュニケーションに少なからず影響を与えるのではないかと推測した。さらに家族とのコミュニケーションと家事労働の関連を発達という視点から捉えなおした研究は行われていない。

そこで、本研究では小･中･高等学校の家事労働の実態として、家事を一人でやっているかもしくは家族でやっているかという視点から把握するとともに、家族とのコミュニケーションを構造的に捉え、発達による変化について明らかにすることを目的とする。加えて、得られた資料をもとに、家庭科の家族学習のカリキュラム編成において、各発達段階の生徒たちの実態に応じた授業展開を考える際の視点を検討していくこととする。

2　研究方法

本研究では、小･中･高校生といった発達段階による家族間コミュニケーションを明らかにするために、中間(2002)の示したコミュニケーションスキルの構造をもとに、家庭生活における具体的な行為･行動を質問項目として質問紙調査項目を作成した。また、家事労働については、コミュニケーションスキルを調査した対象者のうち、小･中･高校生のうち1クラスの生徒を対象として、1週間の家事労働時間について記録をさせた。また、以下調査別に手続きについて述べる。

2.1　質問紙調査

2.1.1　調査対象

アンケート調査は、小学生･中学生･高校生を対象に、島根県松江市内の小学校4校と中学校2校、千葉市内の高校1校を対象に行った。実施期間は2019年3月から4月にかけて行った。児童生徒へのアンケートの概要説明に関しては、事前にそれぞれの学校教師に調査の目的等簡単な説明を行い、教師から児童生徒にアンケートの配布、説明、実施を行ってもらい、後日回収した。

アンケート調査の対象人数･学年･性別の内訳は表1の通りである。

2.1.2　尺度の作成

児童生徒の家族とのコミュニケーションスキルを測るための尺度の作成にあたり、中間のコミュニケーションスキルの構造図を参考にした。言語によるコミュニケーションは「説明･交渉スキル」と「親和感表現スキル」からなり、行為によるコミュニケーションスキルは「協働スキル」「サポートスキル」からなる。これら4つのコミュニケーションスキルについて、家庭生活における行為として具体化し、質問項目とした。なお、質問項目は、小野ら(2017)の「中学生の家庭における居場所感と家族とのコミュニケーションの関連−会話の内容及び

表1　調査対象

学校種	男子	女子	未記入	合 計
小学生(5年生)	152名	167名	0名	319名
中学生(1年生)	173名	200名	15名	388名
高校生(1･2年生)	176名	178名	2名	356名
合 計	501名	545名	17名	1063名

表2　質問項目表

質問項目		
説明･交渉スキル	1	その日の予定について家族と話をする
	2	ほしいものがあるとき、家族を説得する
	3	家族に頼みごとがあるとき自分の言葉で説明･交渉できる
	4	家族と対立したとき、自分の気持ちを表現できる
	5	連絡事項を家族に伝えることができる
親和感表現スキル	6	毎日、あいさつをする
	7	今日、体験したことについて話す
	8	感謝の気持ちを伝えることができる

	9	反省の気持ちを伝えることができる
	10	家族を笑わせることがある
	11	家族と楽しく会話する
	12	家族が困っているとき、元気づけるような言葉をかけることができる
	13	家族が苦しいとき、元気づけるような言葉をかけることができる
	14	自分の好きなことについて話す
	15	自分の嫌いなことについて話す
協働スキル	16	家族と一緒に食事をする
	17	家族が一つの部屋に集まる
	18	家族で出かけることがある
	19	家族で一緒に何かの活動をする
	20	行事を家族で行う
	21	家族全員が気持ちよく生活できるように行動している
サポートスキル	22	家族が忙しい時、家事を代わりに行う
	23	「手伝って」と言われたら断らずに手伝う
	24	自分が手伝ってほしい時に「手伝って」ということができる
	25	家族が病気やけがをしたとき、家事を自分からする
	26	家族が病気やけがをしたとき、看病を自分からする
	27	家族が困っているとき、自分にできることをする。

家族からの一貫した関わりに着目して-」で使用されている質問項目を参考にし、そこに筆者の考えた内容を加え、合計27項目作成した。質問項目は表2のとおりである。アンケートの回答方法は、a. あてはまる
b. ややあてはまる　c. あまりあてはまらない
d. あてはまらない
という4段階評定とした。

2.1.3　調査の実施時期

調査時期は、2019年3月～ 4月であり、小学校と高等学校は家庭科の授業の中で実施し、中学校については、担任の説明のもとホームルームの時間に実施した。

2.2　家事労働時間の調査

2.2.1　対象

質問紙調査を行った小学校5年生、中学校1年生、高等学校1, 2年生の中から、協力を依頼し承諾してくれたクラスの担任教師の担当クラスの生徒を対象とした。児童生徒へのアンケートの概要説明に関しては、小学校･高校は事前に教師に説明を行い、後日教師から児童生徒にアンケートの配布､説明､実施を行ってもらった。中学校では、朝のホームルームの時間を利用して筆者が説明を行い、一週間毎朝朝礼の時間に記録用紙の配布、記録、回収を行った。なお、調査対象は表3のとおりである。

2.2.2　調査内容

表3　対象生徒

	男子	女子	合計
小学校5年生	11名	10名	21名
中学校1年生	18名	17名	35名
高校2年生	18名	19名	37名
合計	47名	46名	93名

本調査では家事労働を行った時間を細かく記録させた。記録期間は一週間で、前日の内容を次の日の朝に記録してもらった。記録方法は、朝6時から夜12時までの一日を30分ごとで区切り、その中で家事労働を行った時間帯に色を塗って記録するという方法である。30分ごとの区切りではあるが、15分なら枠の半分のみ色を塗る、というようになるべく細かく記録するよう指示を行った。その際に、自分ひとりで行った家事労働は塗りつぶし、家族の誰かと行った家事労働は斜線というように区別して表すように指示した。また、最後に一週間の記録をしてみてどのように感じたか、感想を自由に記入してもらった。

3　結果及び考察

3.1　説明･交渉スキルは、問1 ～問5、親和性表現スキルは問6 ～問15、協働スキルは問16 ～問21、サポートスキルは問22 ～問27の合計点を算出した。分析に当たっては、各スキルの合計点を従属変数として、性別と発達段階（小･中･高）の2要因の分散分析を行った。

分散分析の結果、説明･交渉スキルについては､「学校」と「性別」について交互作用（F（2.999）=0.953, P=0.39）は見られなかった。学校（F（2.999）=7.40, P<.001）と、性別（F（1.999）=20.0, P<.001）の主効果は有意であった。学校に対しBonferroni法を用いた多重比較を行った結果､小学校と高校､中学校と高校に有意な差が見られた。高校の方が､小学校･中学校よりも有意に値が高かった。

親和感表現スキルについては､「学校」と「性別」について交互作用（F（2.999）=0.018, P=0.982）は見られなかった。

学校（F=2.999）=2.0, P=0.14）の主効果は有意ではなかったが、性別（F（1.999）=28.6, P<.01）の主効果は有意

であった。

協働スキルについては、「学校」と「性別」について交互作用（F（2.999）=0.452, P=0.637）は見られなかった。学校（F（2.999）=41.2, P<.001）と、性別（F（1.999）=7.29, P<.05）の主効果は有意であった。学校に対してBonferroni法を用いた多重比較を行った結果、小学校と中学校、小学校と高校、中学校と高校すべてに有意な差が見られた。小学校が最も値が高く、次に中学校、高校の順で値が低くなった。

サポートスキルについては、「学校」と「性別」について交互作用（F（2.999）=1.02, P=0.361）は見られなかった。

学校（F（2.999）=3.68, P<.05）と、性別（F（1.999）=20.93, P<.01）の主効果が有意であった。

学校に対してBonferroni法を用いた多重比較を行った結果、小学校と中学校において有意な差が見られた。小学校の方が中学校よりも有意に値が高かった。

学校と性別による各スキル得点と分散分析結果は表4に示している。

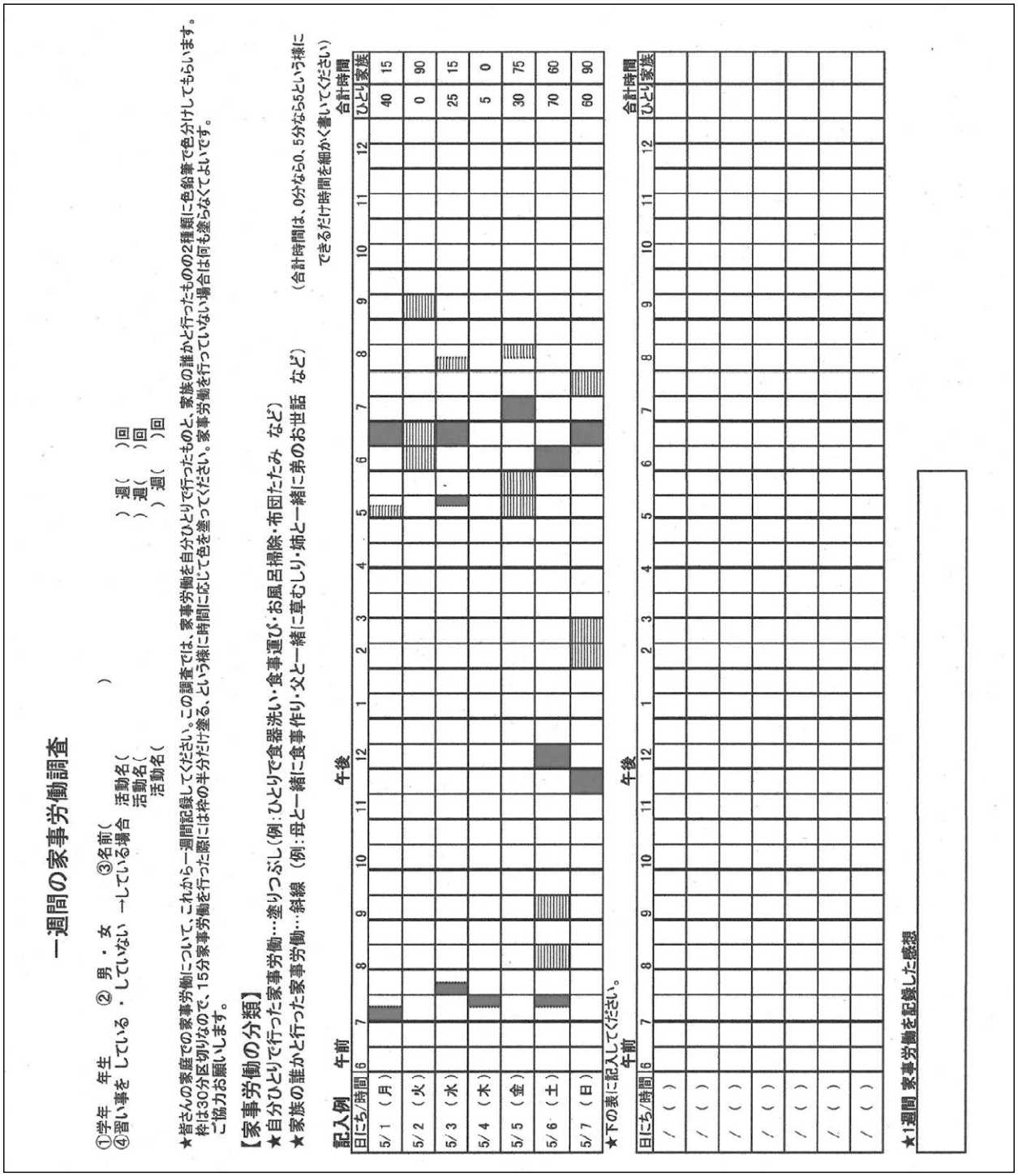

図1　1週の家事労働調査票

表4　学校と性別による各スキル得点と分散分析結果

学校	小		中		高		主効果		
性別	男	女	男	女	男	女	学校	性別	交互作用
説明・交渉スキル	15.2	16.4	15.8	16.3	16.3	17.0	7.40**	19.9***	0.95
	(3.11)	(2.87)	(3.07)	(2.71)	(2.80)	(2.71)			
親和感表現スキル	32.0	33.9	31.2	33.1	31.1	33.2	1.99	28.6***	0.01
	(5.48)	(5.65)	(6.46)	(5.36)	(6.52)	(5.94)			
協働スキル	20.7	21.0	19.3	20.1	18.0	18.6	41.2***	7.29**	0.45
	(2.69)	(2.77)	(3.73)	(3.15)	(4.30)	(4.17)			
サポートスキル	18.4	19.6	17.5	18.9	18.5	19.1	3.68*	20.9***	1.02
	(3.97)	(3.43)	(4.29)	(3.51)	(3.86)	(3.80)			

3.2　小･中･高校生の一週間の家事労働時間調査の結果は、表5の通りである。まず、平日･土日合わせた一週間の合計時間を見ると､小学生が約244分と最も多く、次いで中学生が約170分、高校生が約37分と、進学するにつれて時間が大幅に減少していることが分かる。特に高校生は合計37分と、一週間で1時間にも満たない結果となった。この結果は平均の数値であるが、一人ひとりの内訳を見ると、高校生は小･中学生と比べて、ある程度の時間家事労働を行っている生徒と、全く行っていない生徒がはっきりと分かれていたことが特徴的であった。しかし、実態としては、多くの高校生はほとんど家事労働を行っていないということが分かった。中学生に関しても、平日にひとりで行った時間のみ小学生を上回っているが、その他では小学生の半分程度の時間まで落ち込んでいることが分かる。これまでの先行研究では、発達の段階が上がるにつれて家事労働の参加度は低くなる傾向があるということが報告されているが、本調査の結果からも、現在の家事労働実態は先行研究の通りであるという事が言えるだろう。また、平日･土日いずれの家事労働も、家族と行う時間よりもひとりで行う時間の方が多いことも明らかとなった。

小･中･高校生の平日･土日の合計時間を一日に換算すると、小学生は1日に約34分、中学生は約24分、高校生は約5分と、家事労働時間として多いとは言い難い結果が得られた。

3.3　小･中･高校生の家族間コミュニケーション調査を、中間(2002)のコミュニケーションの構造に基づき分類(説明･交渉スキル / 親和感表現スキル / 協働スキル / サポートスキル)した結果と、家事労働の実態調査結果を相関分析することで関連性をみた。家事労働調査の分析における内訳は以下の様である。

① 平日 / 土日
② 家事労働をひとりで行ったか / 家族の誰かと行ったか
③ 兄弟がいるかどうか
④ 兄弟数

相関分析の結果、兄弟がいるかどうか･兄弟数と4つのスキルに関しては、特に有意な差は見られなかった。また､コミュニケーションとの関連性に関しては､説明･交渉スキルと親和感表現スキルについては、特に有意な相関は見られなかった。

しかし、協働スキルと平日にひとりで行う合計(r=.22, P<.05)と、協働スキルと平日に家族と行う合計(r=.24, P<.05)、協働スキルと土日にひとりで行う合計(r=.30, P<.05)においては、有意な正の相関が確かめられた。これは、平日にひとりまたは家族と家事労働を沢山行っている、土日にひとりで家事労働を沢山行っている児童･生徒は､｢家族で一緒に何かの活動をする｣｢家族全員が気持ちよく生活できるように行動している｣｢行事を家族で行う｣等の協働スキルに分類される家族間コミュニケーションが、十分にとれている傾向があることが分かり、反対に平日にひとりまたは家族と家事労働を行っていない、土日にひとりで家事労働を行っていない児童･生徒は、協働スキルに分類されるコミュニケーションがとれていない傾向がある、ということが言える。

また、サポートスキルと平日にひとりで行う合計(r=.26, P<.05)にも、有意な正の相関が確かめられた。これは、平日にひとりで家事労働を沢山行っている児

表5　1週間の家事労働時間の平均(分)

	平日･ひとり合計(分)	平日･家族合計(分)	土日･ひとり合計(分)	土日家族合計(分)	1週間合計時間(分)
小学生	78.4	69.2	54.4	42.2	244.2
中学生	91.8	34.6	27.8	16.5	170.7
高校生	20.4	2.9	10.9	2.8	37

童･生徒は､｢家族が忙しいとき、家事を代わりに行う｣｢家族が困っているとき、自分にできることをする｣｢家族が病気やケガをしたとき、家事を自分からする｣等のサポートスキルに分類されるコミュニケーションが、とれている傾向があることがわかる。一方平日にひとりで家事労働を行っていない児童･生徒は、サポートスキルに分類されるコミュニケーションがとれていない傾向がある、ということが言える。相関分析による分析結果は以上である。

これらの結果から、コミュニケーションスキルのなかで協働スキルとサポートスキルに分類されるコミュニケーションが家事労働と深く関係していることが分かった。協働スキルとサポートスキルは他の二つの分類に比べ、家族を家事労働等によって支え、共有行動など家族と一緒にいる時間が多いことが特徴的である。家事労働をすることによってその時間が増え、日頃から家事労働をしていることで、いざ家族が病気の時や困っているときに、率先して助けることができるのではないかと考察できる。また、家事労働をしているということが、協働スキルの｢家族全員が気持ちよく生活できるように行動している｣などの自己意識を自然と高めている可能性もあるのではないかと考えた。さらに、｢家族と一緒に食事をする｣については、家事労働の種類の中でも食事作りや食器運び、食器洗い等の食事に関するものは比較的多いことから、家族みんなの食事前の準備を手伝い、その後一緒に食事するという一連の流れとして定着しているのではないかと考えた。

また本調査において、家事労働をひとりで行うか家族の誰かと行うかという分類に関しては、あまり有意な結果が得られなかったことから、本調査では、想定していたよりも家事労働を誰と行うかは、家族間コミュニケーションとの関係が強くはなかった。しかし、家事労働を家族としていることが、家事労働中にコミュニケーションをとっている、ということの証明にはならない。この点は、本調査では明らかにすることのできない内容である。これは今後より詳細な調査を行うことで、明らかになっていく可能性があるのではないかと考える。

4　まとめ

本研究では、小･中･高校生の家族間コミュニケーションの実態と家事労働の実態、そしてそれらの関係性を検討した。コミュニケーションでは、小･中･高校生で発達段階による差が見られ、説明･交渉スキルは高校生の方が高く、協働スキル･サポートスキルは発達段階ごとに低くなっていくことが明らかとなった。また、性別による差も見られ、男子よりも女子の方がコミュニケーションをとっていることが分かった。

家事労働については、一週間の家事労働時間を調査したところ、小･中･高校生と発達するにつれて、家事労働時間は大幅に減少していることが分かった。また特に高校生はほとんど家事労働を行っていないことが分かった。さらに、その家事労働は家族と行うものよりも、ひとりで行う時間の方が多いことが明らかとなった。現在の子どもの家事労働時間は多いか少ないかという判断は、その基準が定かではないため本研究のみでは判断することができない。しかし、一日の家事労働平均が一時間にも満たないという結果は、決して多くはないと言えるだろう。今後、家庭科教育を通してその時間を増やしていくことが必要であり、これからの大きな課題であると考える。

家族間コミュニケーションと家事労働との関連については、協働スキルとサポートスキルにおいて有意な結果が得られたことから、少なからず家事労働と家族間コミュニケーションには関係性があることが明らかとなった。

また、家事労働をひとりで行っても家族と行っても、あまり家族とのコミュニケーションスキルには関係がないことも明らかとなった。家事労働をすることには家族間コミュニケーションにおいて多くのメリットがあると考える。家事労働の最中に特に家族とコミュニケーションはなくても、後に家族から感謝の気持ちを伝えられたり、皆が気持ちよく生活することができたりなど、間接的に家族との会話が増え、居心地の良い家庭環境をつくるきっかけになることも十分あり得る。さらに、自分の役割意識の向上や、家族の役に立っているという充実感は、家事労働を行うことで得ることができ、家庭という安心できる居場所が必要な小･中･高校生にとって非常に重要な心情であることからも、改めて家事労働の重要性を認識することができた。今回の研究では、家事労働をひとりで行ったか、家族の誰かと行ったかという視点で家族間コミュニケーションとの関係性を検討したが、この他にも家事労働中の家族との会話内容の調査などを行うことで、コミュニケーションのより詳細な内容を知ることができるのではないかと考える。

【引用文献】

金良桃子･國吉真哉. (2013). 家族とのコミュニケーションと生活技術の定着について.日本家庭科教育学会誌.55.4.237-245.

文部科学省(2016) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/__icsFiles/afieldfile/2016/08/22/1376199_2_2_4.pdf (2018年10月16日取得)

中間美砂子. (2002). 生活を創るライフスキル-生活経営編-(pp46-48). 東京:建帛社.

小野田瑠璃･吉岡和子. (2017). 中学生の家庭における居場所感と家族とのコミュニケーションの関連-会話内容及び一貫した関わりに関して-. 福岡県立大学心理臨床研究. 9.13-26.

大久保智生･澤邊潤･赤塚佑果. (2014).｢子どものコミュニケーション能力低下｣言説の検討. 香川大学教育実践総合研究29.93-105.

総務庁青少年対策本部(1995). 子ども家族に関する国際比較調査の概要. 子どもの家事分担(図3)
https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/kodomo/images/zu03.html(2018年11月4日取得)
東京ガス都市生活研究所.(2017). 家事する夫、家事しない子供
https://www.tokyo-gas.co.jp/Press/20170119-02.html(2018年11月30日取得)
田中宏子.(2015).児童の家事分担と協調性の高まり.滋賀大学教育学部紀要.65.25-34.
宇佐美佳枝・菊池るみ子・深田祐規子.(1993). 小学校における家庭科教育の意義-児童の家事参加に関する調査を通して-. 高知大学教育学部研究報告. 1.46.129-138.